

8 高等部Ⅲ課程研究班（道徳授業実践研究班）

「高等部Ⅲ課程における道徳の授業の実践研究」

ア 研究のねらい

- 道徳別葉の見直しを行う。
- 年間指導計画を基に、道徳の授業の計画・実施・評価・改善を行う。

イ 研究の内容

- 研究の仮説
 - ・ 生徒の実態や社会の現状に沿った学習内容を設定し、実践することで、生徒の主体的に学ぶ力や人間関係の形成のためのコミュニケーション力の向上につながるのではないか。
- 研究の方法
 - ・ 道徳別葉、年間指導計画、中学校道徳の学習内容を見合わせ、内容の検討や整理を行う。
 - ・ 高等部2-1、3-1の生徒を対象としたアンケート調査による事前アセスメントを実施する。（7月）
 - ・ 高等部2-1の生徒を対象に授業実践を行う。「よりよい集団づくり②」（9月）
 - ・ 高等部3-1の生徒を対象に授業実践を行う。「卒業後の悩みやトラブルについて考える」（10月）

ウ 成果と課題

- 生徒の考え方の変容について
 - ・ 自分が集団の一員であることを自覚するようになった。
 - ・ 日常生活の各場面で自分がどのような役割を担っているのかを考えるきっかけづくりとなった。
 - ・ ラグビーイングランド代表の訪問イベントを通して、礼儀やマナー、思いやりなど、道徳的価値観に気付く生徒が多くいた。
 - ・ 卒業生からの実際の相談内容を例に取り上げたことで、生徒たちの中で卒業後の生活イメージがより具体的になった。
 - ・ 授業実施後に生徒同士で主体的な意見交換が行われた。同じ不安を抱えている仲間がいるという集団意識、不安や課題を解決するために近くの人に相談してもいいという課題解決能力の向上につながった。
 - ・ 道徳の授業を実施することで、自分の意見を伝え、相手の意見を聞く経験を積み重ね、「自己の考え方の柔軟性」「他者と関わる力」「自分を見つめ直す力」「全員で向かって行く力」「自分の気持ちを言葉にする力」が高まった。また、各授業における学習態度の育成にもつながった。
- 授業実践及び教育活動全体での道徳的指導に関する課題
 - ・ 場面絵の内容や提示の仕方、タイミング等によって、生徒の学習内容に関する理解度に大きな違いが出てくる。
 - ・ 道徳で取り扱う単元やテーマについて理解度は高まったが、日常生活へ般化するためにはより具体的な学習や見立てが必要である。

- ・ 日常生活態度の改善へ向けたアプローチ方法（指導者、期間、タイミング等）を各生徒において慎重に検討していく必要がある。
- ・ 進路、作業学習、職業の学習内容とさらに関係性をもたせていきたい。
- ・ 道徳別葉の活用の仕方や教材調達の方法の検討が必要である。
- ・ 学習段階表等の指導支援の根拠となるものがなく、学習内容や学習活動に関して担当教員の主観的思考の影響が強い場面が多かった。

※ 参考文献

- ・ 中学校道徳の学習内容
- ・ キャリア教育で育む「基礎的・汎用的能力」の生徒実態把握

9 高等部Ⅲ課程研究班（職業・共生コース研究班）

『「職業コース」の実践研究～夢・人・地域「社会とつながる特別支援学校」推進事業実施計画に伴う研究～』

ア 研究のねらい

本校は、本年度より3か年計画で、宮崎県教育委員会推進事業『夢×人×地域 社会とつながる特別支援学校「職業コース」実践研究』の指定を受けた。

この推進事業と連携し、本校高等部のⅢ課程の取組を評価改善することで、生徒がより一層主体的に学ぶことができる新しい教育課程のあり方を見出していきたいと考えた。よって、本研究班を設定した。

イ 研究の内容

- ① まず、私立高校も含めた先進的な他校の実践調査を行った。推進事業との連携で、12月には、広島市立広島特別支援学校・山口県立宇部総合支援学校の視察研修も行った。
- ② 次に、高等部全職員を対象に、「現在の高等部Ⅲ課程に関する成果・課題・改善案」について、アンケート調査を行った。自由記述によるアンケートであったので、『テキストマイニング』という手法を用いて集約を行った。

（別紙資料《図1 高等部Ⅲ課程の成果・課題・改善策に関するアンケート集約結果》参照）

- ③ そして、②の結果に基づき、高等部全職員を対象に、「これからⅢ課程に導入すべき教科学習」についてアンケート調査を行った。集計および学部での協議を行い、次年度以降の新しい教育課程を決定した。（別紙資料《表1 Ⅲ課程に導入する新教科学習アンケート集約結果》参照）
- ④ 最後に、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ課程の理念を端的に示す「コース名」の設定を高等部全職員による協議で行った。高等部学部会との連携を活用した。

ウ 成果と課題

① 成果

- (ア) 他校の調査や視察研修により、全国的な動向を把握することができた。
- (イ) 改善案アンケートにより、「教科学習充実」のコンセンサスが得られた。
- (ウ) 導入教科アンケートにより、「作業学習」を2時間削減し「情報」と「社会」を1時間ずつ導入すること、「総合学習」を1時間削減し「職業」を1時間増やすこと、の2つの教育課程改善が決定した。
- (エ) 「コース名」を全職員で協議することで、各人の教育課程改善への関心が高まった。

② 課題

- (ア) 次年度、新しい教育課程の試行実施を行い、評価改善を行っていく。
- (イ) 高等部全職員による「コース名」協議は引き続き行い、県下一斉実施等について特別支援教育課とも連携・協議を続けていく。

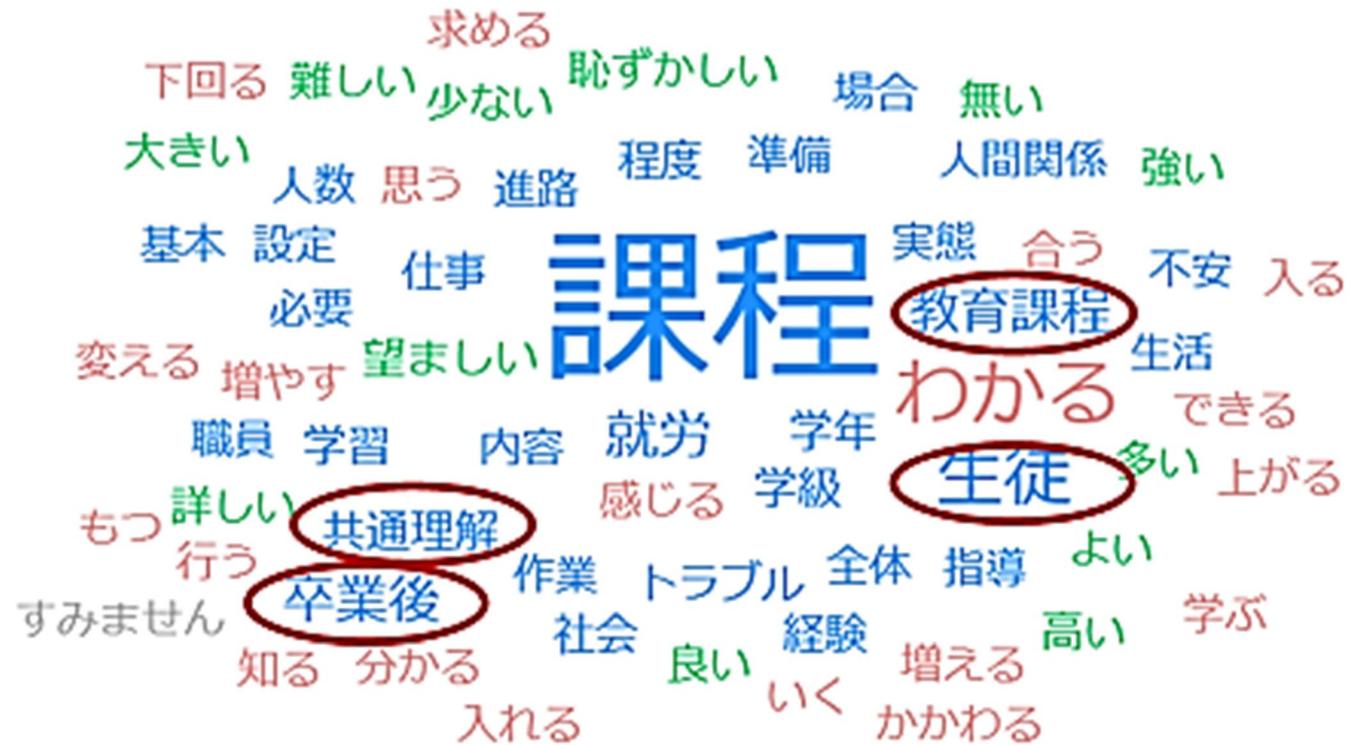
※ 参考文献・参考資料

- ・『User Local テキストマイニングツール』（最終閲覧日：2020年1月28日）

<https://textmining.userlocal.jp/>

- ・文部科学省『特別支援学校高等部学習指導要領』（2019）

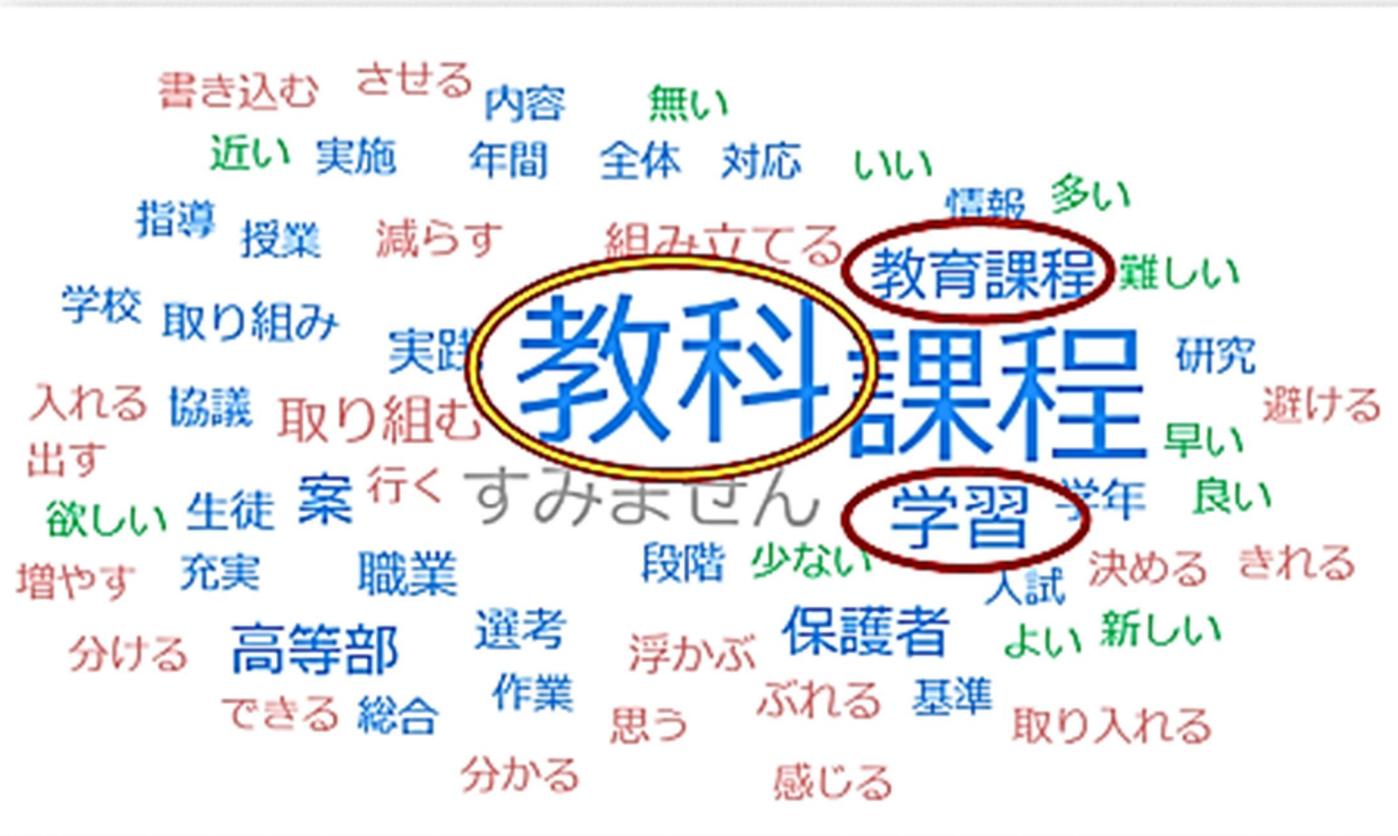
課題



2019 校内研究高等部「職業コース」実践研究班

図1-(2) 高等部Ⅲ課程の成果・課題・改善策に関するアンケート集約結果（課題）

改善策



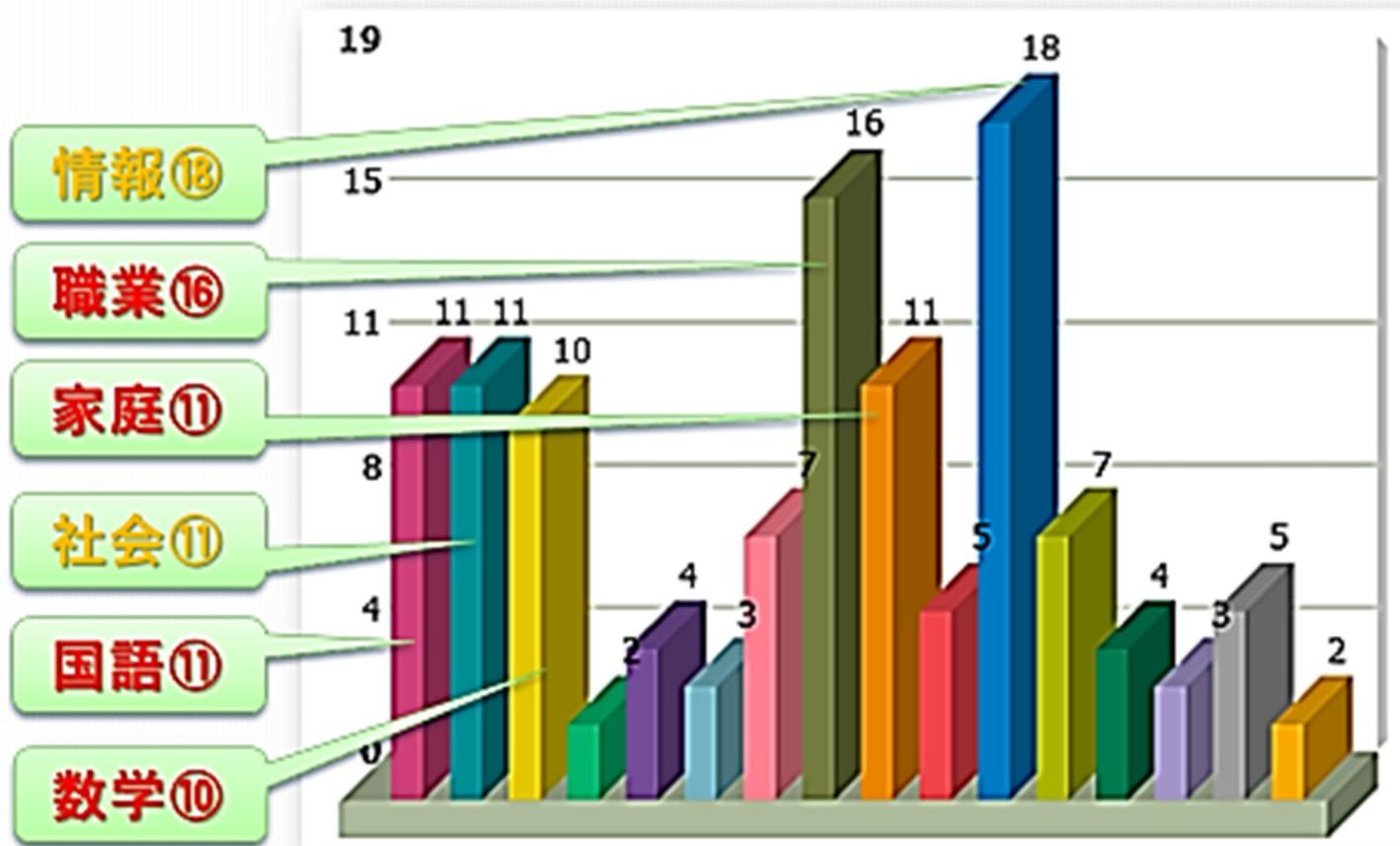
2019 校内研究高等部「職業コース」実践研究班

図1-(3) 高等部Ⅲ課程の成果・課題・改善策に関するアンケート集約結果（改善策）

表1 III課程に導入する新教科学習アンケート集約結果

結果1：導入すべき教科

Good Idea!



10 高等部作業学習研究班 「企業と共同して取り組む作業学習の開発」

ア 研究のねらい

本校は、本年度より3か年計画で、宮崎県教育委員会推進事業『夢×人×地域 社会とつながる特別支援学校「職業コース」「共生コース」の実践研究』の指定を受けた。この推進事業と連携し、本校高等部の作業学習の取り組みを評価改善することで、生徒がより一層主体的に学ぶことができる新しい作業学習のあり方を見出していきたいと考えた。よって、本研究班を設定した。

イ 研究の内容

- ① 作業学習に必要とされること、現状の把握（協議・共通理解）
- ② 企業が考える障がい者の採用について
- ③ 作業学習の再編（環境整備班と福祉・流通班の新設や再編、ねらいや目標の共通理解）
- ④ 作業学習全体計画と次年度の年間指導計画の立案
- ⑤ 作業種目に関する参考調査の決定
- ⑥ 次年度、作業学習の運営に関する共通理解
- ⑦ 作業学習全体における全体発声訓の作成

ウ 成果と課題

- ① 成果
 - ① 次年度にむけて、作業学習再編を行い、試行するまで到達することができた。
 - ② 作業学習に関する共通理解を高等部内で図ることができた。
 - ③ 他校の調査や視察研修により、全国的な動向を把握することができた。
- (2) 課題
 - ① 次年度、新しい作業学習の試行実施を行い、評価改善を行っていく。
 - ② 現場実習との関連や作業学習の評価に関する内容
 - ③ 作業学習における生徒の配置の方法と協議の在り方
 - ④ 授業形態の在り方と生徒の実際の活動内容
 - ⑤ 作業形態の全体評価

参考文献

文部科学省「特別支援学校高等部学習指導要領」（2019）

植草学園大学発達教育学部准教授・広島大学大学院教育学研究科 客員准教授
菊地一文氏「児童生徒のキャリア発達を支え、主体的な学びを深める授業づくり」

11 寄宿舎研究班 「主体的に生きる力を育む指導・支援の在り方」

ア 研究のねらい

前年度の研究において、生徒の活動を見直した結果、自治活動や行事は多く企画されているが、生徒の実態や時間等の関係もあり、職員主導で計画を進めることが多々あった。活動自体には意欲的に参加するものの、受け身の生徒が多い傾向にあるため、課題となっている主体性・社会性の成長について、自分たちの意思や判断で物事を進める経験が必要と考えた。そこで、行事の一つである「秋のイベント」に焦点を当て、集団活動を通じた主体的に生きる力の育成を目指した。

イ 研究の内容

1 イベントに向けた指導・支援

(1) イベントリーダー選出

各棟から研究対象となるイベントリーダーを1名選出。

(2) 実態把握

話し合い活動における主体的な力とは何かを協議し、実態把握シートを作成。伝える力、聞く力、話し合う力の3領域を細分化した項目ごとに棟職員で実態把握。

(3) イベントリーダー支援計画シート作成

実態をもとに身に付けさせたい力を棟の職員で検討し、3領域それぞれに目標と手立てを設定。

(4) 変容チェックシート作成

イベントリーダー支援計画シートと連動させ、手立ての有効性の確認や職員間で変容の共通理解を図るために作成。

(5) 実際の指導・支援

作成したシートに沿って、変容を適宜確認しながら実践。

2 汎化に向けての取組

(1) 機会の創出、設定

イベントに向けた指導・支援で培った力を汎化する場面や環境を各棟で話し合い実践。

(2) 検証

3 寄宿舎研修の実施

(1) 本校指導教諭の栗原先生に講師を依頼し、「自閉スペクトラム症の特性に応じた支援」の講義をしていただいた。また、実際の寄宿舎での対応など事例を出しての質問に答えていただいた。

(2) 施設見学を実施。児童生徒を取り巻く支援環境について知るとともに、個別の生活支援計画作成の際に必要な知識を得るため、4カ所の施設に分かれ見学。

(3) 自主研修として、「寄宿舎定期研修」を週に1回実施。

ウ 成果と課題

<成果>

- 話し合い活動に焦点を当てて協議や情報交換をする中で、話し合い活動の指導に当たる際の考えやアイデアの共有ができ、生徒の話し合いスキルの向上に役立った。また、職員の指導・支援の幅が広がった。
- イベントリーダーの生徒については、棟での話し合いや日常でも発言が増え、いろいろな場面で積極性が見られるなど、主体的に取り組む態度や意識の向上が見られた。また、リーダー以外の生徒においても、責任感を共有することで積極性や協調性が生まれ、次年度の舎生会を担う生徒の意識の変化を感じることができた。
- 生徒主体で何かをやり遂げる場を設定し、繰り返し経験を積み重ねながら、その過程で身に付けた力を自分で確認することや、まわりから賞賛されることによる自己肯定感の高まりが成長に大きな影響を与えることを再認識した。
- 交代制勤務の寄宿舍において、共通理解を図り一貫性のある指導を行うための工夫としてイベントリーダー支援計画シート、変容チェックシートを作成した。他棟の生徒であっても実態や目標、変容がわかりやすく、連携した支援ができたため、今後の活用も期待できる。
- 講義、見学、自由参加の研修を実施したことにより、職員の資質向上につながった。

<課題>

- 棟の活動の中で見られた成長を、寄宿舍全体の活動や舎生会の活性化に繋げていくために指導・支援の創意工夫に努めていきたい。
- 今回は、適宜、職員と一緒に振り返り、身に付けた力を確認したが、生徒自身で自己評価できるよう記録の工夫や、自己評価能力の育成を図る必要がある。
- 今回のような短期での指導・支援では、明確な効果があまり見られない生徒もいた。いろいろな生徒の的確な実態把握、その実態に沿った適切な目標設定、効果的な手立ての検討など、多様な生徒の実態に対応できるよう更に専門性を向上していく必要がある。

実態チェックシート

| | ① 達成度を下記の基準でチェックしてください。 1:達成できていない 2:あまり達成できていない 3:ほぼ達成 4:達成 ※ おおよその目安です。チェックできないものは無記入で構いません。 ② 今後の指導支援の内容として取り上げるものに○をつけてください。 ※ 生徒の実態に即した項目がない場合は追加もしくは変更してください。 ※ 約2か月間で取り組める内容と量にしてください。 | ① 達成度 | | | | ② 指導内容 |
|------------|--|-------|---|---|---|--------|
| 伝える力 | 適切な声の大きさと話す | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 適切な速さで話をする | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 自信を持って発表する(顔を上げて発表・発表の際の表情など) | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 状況に応じた言葉遣いや態度である(敬語・けじめのある態度など) | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 挙手や指名をされてから発言する | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 発言内容が相手に伝わる | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 自分の気持ちや考えを適切に表現する | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| 聞く力 | 正しい姿勢で話を聞く | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 話し相手の顔を見る | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 相手の話を集中して最後まで聞く | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 分からないことをことを質問する | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 指示されたとおりに行動する | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 相手の意見を肯定的に聞く(うなずき、笑顔などの態度面) | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 指示や話の内容を理解して的確に他の人に伝える | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| 話し合う力・関わる力 | リーダーとしての自覚を持ち、積極的な姿勢である | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 自分の考えを押しつけない | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 相手によって態度を変えず、公平に接する | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 周囲の意見を引き出そうと努める | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 他者と協力して良いものを作ろうとする態度である | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 他者に肯定的に関わる(人を注意しない、あったか・ちくちく言葉などの行動面) | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 話し合いを適切にまとめて結論をだす | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | 相互性のあるやりとりをする(適切に働きかけ、適切に応答する) | 1 | 2 | 3 | 4 | |
| | | | | | | |

変容チェックシート

棟：C1 氏名：高2 男子

| チェック項目 | 場面（日付） | 所見・特記事項など |
|-------------------------------------|----------|--|
| ◎ 話し相手を注視する。 | 棟会9/5 | 各発表者をしっかり見ていた。 |
| | イベント9/9 | 5割程度見ていた。 |
| | イベント9/11 | 前半は、注視しながらうなずくことができた。後半は下を向くことが多かった。 |
| | イベント9/18 | 前のめりで話を聞いていた。うなずきも、良くできていた。 |
| | 棟会9/19 | 相手を見ながら、質疑応答ができていた。 |
| | イベント9/25 | 発言者の方を向くが、何も無い時に下を向くことが多かった。 |
| | イベント10/8 | 欠席 |
| ◎ 顔を上げて発表する。 | 棟会9/5 | 進行表を見ながら発表する機会が多かった。 |
| | イベント9/9 | 自信なさげに下を向いて発表していた。 |
| | イベント9/11 | 意見を発表できたが、声が小さかった。 |
| | イベント9/18 | 小グループで話し合った意見を積極的に発表できた。 |
| | 棟会9/19 | よくできていた。 |
| | イベント9/25 | 発表できたが、声が小さく司会者だけを向いて話していた。 |
| | イベント10/8 | 欠席 |
| ○ 適切な声の大きさである。 | 棟会9/5 | 自信のない部分は小さくなっていった。 |
| | イベント9/9 | 緊張が見られ、全体的に小さかった。 |
| | イベント9/18 | 周囲と話し合った意見だったため、自信をもって大きな声で発表できた。 |
| | 棟会9/19 | 自信のない部分は、小さくなっていった。それ以外は問題なし。 |
| | 棟会10/10 | 全体をとおして、自信をもって発表できていた。今後の課題は、不慣れなイベントリーダー会議である。 |
| | | |
| ○ 適切な言葉遣いや態度である。（優しい言動・敬語の使用・公平な態度） | 棟会9/5 | 相手によっては、強い言い方になる場面があった。 |
| | 棟会9/19 | ほぼ敬語で話すことができていた。 |
| | 棟会10/10 | 活発に意見を発表する生徒以外にも、満遍なく全体的に意見を伺う姿勢が見られた。会議中は、問題なく敬語が使用できていた。 |
| | | |
| ○ 棟会の司会進行役として、適切に役割を果たしている。 | 棟会9/5 | 進行表の手順に沿って進めたが、練習が足りないと感じた。本人もそのことを自覚しており、反省していた。意見が出なかった際、指名して、意見を引き出すことができていた。 |
| | 棟会9/19 | 手順表を使わず、事前の説明だけで、ある程度は話し合いの形を成すことができた。しかし、練習と慣れは、依然必要である。 |
| | 棟会10/10 | 時折、支援を受けながらではあるが、自分の力で意見集約から結論に至ることができた。 |

イベントリーダー支援計画シート

生徒氏名 高2 男子

記入者 C1棟職員

| 実 態 | |
|-------|--|
| 手帳： | 障がい種別： |
| 伝える力 | <ul style="list-style-type: none"> 発音の明瞭さや声量については問題なく、自分の気持ちを言葉で表現し、コミュニケーションをとることができる。しかし、自信がなかったり、慣れない場面になったりすると、消極的な態度になる。 場面や相手に応じた言葉遣いをする力はもっているが、適切に使用できていない。 話す内容を整理して伝えることが苦手である。 |
| 聞く力 | <ul style="list-style-type: none"> 話を最後まで聞くことはできるが、相手を見たり、肯定的な態度で聞いたりすることは苦手である。 聞き取る力に関しては、内容が簡潔であれば問題ないが、複雑になると理解が困難になる。 |
| 話し合う力 | <ul style="list-style-type: none"> 話し合いに臨む姿勢や態度は、積極的であり、リーダーシップをとりたい気持ちが強い。 相手によって態度を変えることがある。言いやすい相手には、厳しい言動が目立つ。 周囲の意見を元に、結論まで導くことは困難である。 |



| 目 標 ・ 手 立 て | | |
|-------------|-----|---|
| 伝える力 | 目 標 | <ul style="list-style-type: none"> ① 自信を持って発表できる。 ② 話す内容を整理して、相手に理解されやすい伝え方ができる。 |
| | 手立て | <ul style="list-style-type: none"> ① 事前に発表内容を確認し、職員を相手に練習を行う。 ② 話形例のシートを使用して、発表を繰り返しながら、順序立てた話し方を学ばせる。 |
| 聞く力 | 目 標 | ○ 相手の話を適切に聞く態度を身につける。 |
| | 手立て | ○ マンツーマンで聞く態度についてのロールプレイを行う。 |
| 話し合う力 | 目 標 | <ul style="list-style-type: none"> ① 誰に対しても公平かつ肯定的に接することができる。 ② 話し合う方法を身につけ、周囲と協力して結論を出せるようになる。 |
| | 手立て | <ul style="list-style-type: none"> ① 自身の実態を把握させた上で、肯定的な関わり方について事前学習し、棟会の場面で練習を重ねる。 ② 実態に即した話し合いの手順表を作成し、結論を導く方法を形式的に学ばせる。 |



| 日付 | 指導・支援の記録 | 特記事項 |
|-------|---|------------------------------|
| 9/2 | <ul style="list-style-type: none"> 棟での話し合いをする前、「話し合いの手順表」に、進行内容を記入させ、繰り返し練習をした。発表する態度についても、ロールプレイで練習をした。 意見が出にくい際の対処法として、司会が指名をするなどの方法を教えた。 | 字の読み書きについては、丁寧な支援が必要である。 |
| 9/11 | <ul style="list-style-type: none"> 話を聞く態度（相手を注視・相づち）について職員とロールプレイをした。 発表する際の声量について、緊張する場面では小さくなる実態を共通理解し、会議の場では、意識して大きな声で発表するように指導した。 | |
| 9/19 | <ul style="list-style-type: none"> 司会に必要な態度（言葉遣い・公平な態度）について指導した。 話し合いの手順表に協議内容を記入させ、司会のロールプレイをした。 話を聞く態度の成長点を共通理解した。 | |
| 9/25 | <ul style="list-style-type: none"> イベントリーダー会議用に、発表する内容を整理した書式に記入させた。 | 書式の内容を容易にすると、理解度が上がった。 |
| 10/10 | <ul style="list-style-type: none"> 棟会実施後に、フィードバックを行い、進行時の言葉遣いと意見の集約方法について再確認した。言葉遣いについては、職員とロールプレイで練習を重ねた。 | |
| 10/15 | <ul style="list-style-type: none"> イベントのリハーサルをするにあたり、実施前に課題を与えた。分からないことを質問したり、同じ係の生徒と協力したりして自分たちの力で課題を解決し、本番に備えるよう話した。 | |
| 10/17 | <ul style="list-style-type: none"> イベント前に動きの最終確認と臨む姿勢について再確認した。終了後には、イベントまでの振り返りを行い、培った経験と力をフィードバックした。 | イベントが成功したことにより、達成感と自信が感じられた。 |
| 11/5 | <ul style="list-style-type: none"> 般化を図るため、12月に行われる「お楽しみ会」の中心メンバーとなるよう依頼したところ、意欲的に申し出を受け入れた。 | イベントリーダーの経験が自信に繋がっていると感じた。 |



| 汎化の取り組み | | |
|---------|--------------|--|
| 日付 | 活動内容 | 所見 |
| 11/7 | お楽しみ会の発表内容決め | <ul style="list-style-type: none"> 秋のイベントリーダーで培った力を汎化させるねらいで、12月に行われるお楽しみ会の内容決めを任せることとなった。本人は、担当することに積極的であり、イベントリーダーで重ねた経験が自信に繋がっていると感じた。 |

| | | |
|---------------------|-----------------|---|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・司会としてのスキルは未熟であるため、実態に即した司会進行表の準備と結論に至るまでのプロセスを事前に学ばせた。 ・話し合いの様子としては、言葉に詰まりながらも、積極的に意見を引き出したり、みんなが楽しめる内容になるよう説明したりするなど、評価できる部分が多かった。 ・結論に至ることはできなかったが、終了後に自分の課題と感ずる部分を振り返ることができていた。 |
| 11/12 | 前回の続き | <ul style="list-style-type: none"> ・前回の話し合いの続きを行ったが、達成困難な内容に決まりそうだったため、職員が支援をし、決定に至った。出し物は歌劇に決定。 ・本生の考えで、歌の内容やそれに付随する出し物について、中心的に進めるリーダーを数名募った。結果、4名の生徒に決まった。 |
| 11/14 | 棟会で出し物の内容の構想を披露 | <ul style="list-style-type: none"> ・リーダーが中心となって考案した出し物の構想を棟の生徒達に発表し、意見を伺った。発表の方法や構想の完成度は未熟であったが、それぞれが一生涯懸命伝えようとしていた。結果、棟の生徒全員が納得した。 |
| 11/18 ～ 11/29 | リーダー会議 | <ul style="list-style-type: none"> ・リーダー達は、期間中の自由時間のほとんどを会議に充て、内容を整理したり、新たなアイデアを出し合ったりした。 |
| 12/2 | 棟会で出し物の内容を再提案 | <ul style="list-style-type: none"> ・現場実習で不在にしていた高校3年生に、煮詰めた発表内容を報告した。理解してもらえるよう事前にリーダー同士で報告方法を確認していた。結果としては、まだまだ改善が必要であるが、1回目の発表よりも随分と進歩が見られた。 |
| 12/9 ～ 12/18 | 全体練習 | <ul style="list-style-type: none"> ・自由時間を利用し、全体練習を繰り返した。リーダーが中心となり、生徒の招集や事前の打ち合わせを積極的に行っていた。練習後は、リーダーで集まり反省会を行っていた。次回の練習につながるよう意見を活発に交わしていた。 ・全体練習では、リーダーが交代制で司会を務めるなど、それぞれが主体的に責任感をもって取り組む姿が見られるようになった。 ・練習に参加し、アドバイスや助言をした職員に対して、感謝の気持ちを伝えることが多くなった。 |
| 12/19 | お楽しみ会当日 | <ul style="list-style-type: none"> ・棟の生徒全員の士気を高めようと、中心となって周囲に声をかけていた。 ・終了後の打ち上げの際は、自発的にあいさつを行い、生徒主体でやり遂げた達成感や協力してくれた仲間への感謝の気持ちを述べていた。 |

成果と課題

1 伝える力

- 話し合い前の練習や、話型例のシートを活用しながら経験を重ねたことで、自信をもって発表できる機会が増えた。
- 慣れていない場面や会議の内容においては、変化があまり見られなかった。

2 聞く力

- 話し相手を注視したり、共感の態度を示したりすることが多くなった。
- その時気分や会議の内容、協議時間によって集中力が長く続かない傾向にある。

3 話し合う力

- 会議中の態度は向上し、敬語を使用したり、互いの意見を尊重したりするようになった。
- 簡単な内容であれば、司会役として問題提起から結論に至るまでのプロセスを少しの場面支援でできるようになった。
- 発言力のある生徒の意見ばかりを尊重するのではなく、その他の生徒の意見を引き出そうと努めるなど、話し合いを充実させようという姿勢が身についた。
- 汎化の取り組みにより、場面が変わっても、自主的に話し合いをして何かを決める習慣が、本生だけでなく、全体に広がりを見せた。
- 場面支援を時折入れなければ、話し合いが錯綜する場合がある。

<総合的な所見>

リーダーという役割を担い、支援を受けながら経験を積んだことで、主体的な態度で行事や話し合い活動に参加できるようになった。スキルの面では、課題は多いものの、支援をする前に比べると着実に力がついている。態度面においては、イベント以降の行事の話し合いを率先して開催したり、行事がより良い仕上がりとなるよう積極的に職員からアドバイスを受けたりするようになった。また、寄宿舍の次年度役員に立候補するなど、意識の部分で大きな変容が見られた。

IX 研究のまとめと今後の展望

今年度は、昨年度からの継続研究として「児童生徒の主体的に学ぶ力を育てる指導・支援の在り方」を研究主題としつつ、各研究班のニーズに合わせた研究テーマを設定して取り組んできた。

昨年度は、理論研究及び学習内容や年間指導計画の見直しが進む中、研究授業を含めた授業研究を充実させるまでには至らなかった。そこで、今年度は、研究主題にもあるように、児童生徒の学びを「主体的」という視点で捉えながら、授業改善を図ることを研究の中心に据えて取り組み、授業研究を通じた検証を推進することにした。

今年度の研究についての成果と課題についての考察は、以下のとおりである。

まず、全体研究主題に基づいて各研究班の抱える課題やニーズに応じた研究テーマを設定して取り組む研究を行ったことは、研究班それぞれが抱えている課題に向き合い、職員間で協議をしたり、考えを深めていったりするよい機会になったのではないかと考える。また、昨年度から2カ年計画で取り組んできた今年度の研究であるが、研究班を構成するメンバーが変わる中で、昨年度の研究の成果と課題を引継ぎ、いかに継続性・連続性のある研究としていくかが大きな不安材料であったことは否めない。そのための方策を講じて臨んだ今年度の研究であったが、各研究班において昨年度の課題をしっかりと把握し、その課題解決に向けて新たなメンバーで研究内容を再考しながら研究に取り組んでいったことが、各班の報告の随所に垣間見られている。

次に、「授業研究を通じた授業実践の充実」を今年度は重要視していたが、児童生徒の主体的に学ぶ力の育成を目指して、多くの研究班が研究授業を行い、授業研究を通して評価・検証・改善を重ねることができた。そのことが、児童生徒の主体的な学びを引き出す様々な工夫を導くことにつながっていったのではないかと考える。一方で、授業研究の在り方については、「学習指導案の作成に対する負担感」「授業参観をする職員が少ない」「一部の職員に負担がかかるのではないかなどといった様々な課題も残るため、今後も改善策を検討していく必要がある。加えて、授業研究の意義についても再度考えていきながら、全体への周知を図っていく必要がある。

そしてさらに、今年度は、宮崎県教育委員会推進事業の指定を受け事業と連携して研究に取り組んだ班、大学と連携しながら研究に取り組んだ班があった。それぞれの班が、今年度新たに研究テーマを設定して取り組まなければならなかったが故に、様々な苦労もあったと思われる。しかし、この研究を通して新しい教育課程の在り方を探ったり、新学習指導要領の内容に応じた先進的な取組を進めていったりすることができたことにも大きな成果があったと言える。

最後に、全体報告会については、研究班の数が多く、各班の発表時間が短くなってしまい、1年間の研究成果を十分に報告できなかったのではないかとと思われる。しかし、アンケートの結果を見ると、「内容を簡潔にまとめて発表していたので、端的で分かりやすかった」というような意見が複数挙げられており、各研究班のすべての取組を聞くことができ、有意義な時間だったとの感想も多かった。次年度は、研究組織の構成についても配慮すると同時に、研究のまとめに関連する諸々についてもいくつかの反省も挙がっているので、一つ一つ改善を図っていきたいと考える。

この研究は、今年度をもって2年間の区切りを迎える。そして、次年度からは新たな研究主題に基づいた研究が始まる。これまでの2年間は、改定された学習指導要領の4つのキーワードの中の「主

体的・対話的で深い学び」に焦点を当てて研究に取り組んできた。「児童生徒一人一人の主体的な学びとは何か」を捉えながら授業の実施、指導の改善・充実を図ってきた。この「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、学校教育目標の具現化に向けて編成された教育課程が重要になってくると考える。改定された学習指導要領には、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「子供一人一人の発達をどのように支援するか」「何が身に付いたか」「実施するために何が必要か」という6つの点の枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められていることが記されている。育成すべき児童生徒の資質・能力を具体的に描き、その達成に向けた取組の要となるのが授業づくりであり、その授業づくりの礎になるものが年間指導計画等であると思う。学校教育目標の具現化に向けて全職員で取り組むカリキュラム・マネジメントについても本校の教育課題の一つと言えるのではないかと。その他、各学部を中心として教育課題について整理していきながら分析をし、課題解決に向けた研究となるよう、次年度の方向性を定めていきたい。そして、次年度も、より一層の専門性の向上に努め、児童生徒一人一人の自立と社会参加に向けた指導・支援の充実が図れるよう、研究と研鑽に励んでいきたい。

結びに、本年度の研究に御協力をいただいた数多くのすべての皆様に感謝するとともに、本研究の成果が、今後の取組の一助となることを切に願いたい。